

# 神の模倣

——ディオグネートスへの手紙一〇章を中心に——

川村輝典

## I

「ディオグネートス」は七章から九章に至る三つの章において、精神的にキリスト論を展開している。それは必ずしも体系的な叙述と云うことはできず、これを読む者が行間の意味を読みとらねばならない箇所も多いのであるが、その上でこの部分を整理するならば派遣のキリスト論、啓示論、救済論という形で進められると言えよう。<sup>(1)</sup>このように九章まで教理的な議論を進めて来た著者は、次の一〇章においては以上の論議を踏まえつつ実践的な勧告を述べるのである。私はかつて本書の一〇章と一一一二章とが、別の著者による二つの文書であることを立証した。<sup>(2)</sup>もしその説が正しいとするならば、一〇章は本来「ディオ

グネートス」の末尾か、少くとも結論部分を形成していることとなる。教理的主張をなした後に勧告の部分が位するのは、使徒パウロの手紙において見られる、われわれに馴染んだ形体である。そこでわれわれは、本書のこの末尾の勧告の文章を検討したいと思う。

第一〇章全体は、悔い改めへの招きとその幸いについて記されている。まず一―二節前半において、父なる神についての完全な知識 (*epi-gnosis patros*) を得るように勧められ、次に二節後半―三節において、今度は父なる神のひとり子イエス・キリストについての完全な知識を得ることがどれほどの喜びであるかが語られる。

さてわれわれが特に注目したいのは、次の四―六節の部分である。ここでは「神の模倣」ということが繰返して言われている。

四節 a この方を愛し、この方の慈愛の模倣者 (mimētes) になりな  
 せよ。

b 人間が神の模倣者 (mimētes) になり得るのかと不思議に思  
 うことはない。

五節 b このようなことによっては誰も神を模倣する (mimēsasthai)  
 ことはできず……。

六節 b このような人は神の模倣者 (mimētes) である。

ここには *mimētes* という名詞の形で三回、*mimēsthai* という動詞  
 の形で一回、計四回模倣という概念が使用されている。「神の模倣者」  
 とか「神を模倣する」というような表現は一見キリスト教の信仰にとっ  
 て異質的な印象を与えるが、実際にはこれらの語自体はすでに新約聖書  
 において現れており、名詞形六回、動詞形四回計一〇回の用法が見られ  
 る。前者は I コリント四・一六、一一・一、I テサロニケ一・六、二・  
 一四、エペソ五・一、ヘブル六・一二、後者は II テサロニケ三・七、九、  
 ヘブル一三・七、III ヨハネ一で使われている。これらの語の使用分  
 布を見て直ちに気づくのは、名詞形、動詞形共に福音書には全く用例が  
 なく、パウロ、ヨハネ、ヘブルという手紙文書のみ用いられていると  
 いうことである。なぜこれらの語が手紙文書のみ用いられているので  
 あろうか。

これについては H・D・ベッツが、福音書における史的イエスへの

*secutio* に対応するものとして、パウロ他の手紙文書ではヘレニズム・  
 密儀的模倣概念としての *imitatio* が用いられていることを説明してい  
 る。<sup>(3)</sup> すなわち彼によれば、福音書においては専ら地上のイエスに対する  
 信仰の服従として *secutio* (*akolouthēin*) が用いられているのに対応し  
 て、パウロたちにとってはケリーユグマのイエス・キリストがその対象  
 であるために、もはや *secutio* ではなく *imitatio* (*mimēsthai*) が用い  
 られているのだというのである。*mimētes* 乃至 *mimēsthai* は元来ギリ  
 シャ哲学(プラトン、ピンドロス他)の用語であり、パウロたちにおい  
 てはイエスへの *secutio* の概念のヘレニズム化が行われたと解してい  
 のであるが、それは思想そのもののヘレニズム化とは厳密に区別されね  
 ばならない。

それならば新約の手紙文書では、これらの語がどのような意味で用い  
 られているのであろうか。その代表的な箇所をパウロの手紙から二つと  
 り出して、検討してみよう。<sup>(4)</sup>

I コリント四・一六

△そこで、あなたがたに勧める。わたしにならう者となりなさい▽

ここでパウロが△わたしにならう者となりなさい▽と言う場合、彼は  
 自分自身を救済者などとは思ってもみないであろうし、第二のキリス  
 トともみなしていない。したがってここに述べられていることは、グノ  
 ーシスの救済者の思想とは全く無縁のものである。ただそれにもかかわ

らず、使徒としての彼への *nimেষthai* においてのみ、コリント教会の信者たちのキリストへの模倣が生じるとパウロは考えているのである。しかしそれは道徳的模倣としてパウロが君臨するというのでは全くなく、彼が今立っているキリストとの交りに関係する。その実相はキリストの苦しみにあずかるということである。正にパウロがキリストの苦しみにあずかっているように、あなたがたも同様にキリストの苦しみにあずかってほしい、という勧めなのである。それゆえ、キリストにあってのみ使徒の模範性が成立するのである。その趣旨は一一・一において一層明確に表れている。

#### I テサロニケ一・六

△そしてあなたがたは……わたしたちと主にならう者となり……▽

ここでの問題は模倣の対象がまずパウロ個人からパウロを含めた複数者になっていること、さらに彼らと主（キリスト）とが並行的に対象となっていることである。前者については使徒の立場にある者であるゆえに、パウロ個人の場合とは変らない。後者については使徒たちとキリストが同格であるということではなく、読者が使徒たちに目を向けることにより、さらに彼らの目指しているキリストに至るようにとの願いが表わされているのである。W・ミヒアエリスはこれを「漸層性」という言葉で説明しているが、むしろ使徒たちに倣う姿勢がそのままキリストに倣う姿勢だという意味であろう。

#### 神の模倣

以上に見られるパウロの手紙の場合、直接には信者たちは使徒の信仰の姿勢に模倣することが勧められており、その限りにおいてのみキリストへの模倣が可能となる、という形で述べられている。つまり、キリストへの模倣はあくまでも間接的に勧められていると言える。

これに対してエペソ五・一の例はいささか趣きを異にする。ここではキリスト者が直接△神の模倣者になりなさい▽と勧められている。他の例ではキリストへの模倣も間接的に勧められているのに対して、ここでは神と人との間の媒介者は何もなしに、いきなり神への模倣が勧められるのである。この点についてはどのように考えるべきなのであろうか。

L・ミットンによれば<sup>(5)</sup>、これは新約聖書の中で△人間が神への模倣を

勧められている唯一の箇所であり▽、△最初はほとんどグロテスクとさえ感じる▽と言われる。たしかに彼が言うように、人間が神の模倣者となるということは、聖書の思想からすれば本来あり得ないことである筈である。被造物である人間と創造者である神とは全く異質的なものである、というのが創世記以来の聖書の主張なのであるから。しかしここでは、紛れもなくキリスト者が神の模倣者であるように勧められている。これをどのように解すべきであらうか。

この場合、注目すべき句は一節前の△あなたがたは、神に愛されている子供として……▽である。つまり信者が神の模倣者となるための前提として、信者の方がまず神によって子として愛されている者であること

が告げられているのである。つまり、神の愛が先行しており、いわばそれへの応答として神への模倣が勧められているのであり、具体的にはこれは隣人愛の勧めなのである。そのように考えるならば、これはマタイ五・四八の「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全になりなさい」との主イエスの命令とも内容的には連なるものであると言えることが分かる。

## II

さて以上に於て明かにされた新約聖書における模倣の思想と、「ディオグネートス」における用法の間には何らかの関連を見出すことができるであろうか。それとも両者は全く違った立場に立っているであろうか。

まず四節 a の「この方を愛し、この方の慈愛の模倣者となりなさい」という句は、旧新約聖書に見られる律法の形式をとっている。しかし形式は律法であっても、性格は単なる律法ではない。この場合「神を愛する」ということと「神の慈愛の模倣者とな」ということは同義であり、しかもこの二つの命令に先立って三節では、神が「君をこのように先立って愛して下さった方 (ton houtos proagapesanta se) であることが明かにされているからである。ここには神の先行的愛 (agape) が語られ、しかる後初めて君も神を愛しなさいと言われているのである。

それゆえ、これは単なる律法的な服従の要求ではなく、信仰に基づく服従の要求に他ならない。したがって四節 b において、「神は欲すればおできになるのだ (dynatai thelontos autou) というように神による可能性ということを強調するのである。つまり、人間の可能性に先立つ、さらに人間の不可能性の壁を突破させるものとしての神の可能性が前提されているのであって、その限りにおいては、この箇所における「ディオグネートス」の立場は明かに新約的(パウロ的)であり、律法的ではなく福音的であると言える。

以上の事実を踏まえた上で、次に五―六節では隣人愛の必要性がまず消極的に、次に積極的に説かれるのである。五節ではたしかに「隣人を愛せよ」とは言われていない。しかし隣人に対して暴力的に振舞うことが禁ぜられ、他者よりも強者であろうと欲することも、他者の上に立つてこれを支配しようとすることも厳しく戒められているゆえに、それは隣人愛の消極的な勧めであり、裏側からこれを補強するものと言えるのではないであろうか。かくして最後に、そのことが結局神の模倣者になる(「神を愛する」ことだと言うのである)。

六節は五節に述べられたことを積極的な面から、すなわち隣人愛の勧めを正面から述べている。「隣人の重荷を引き受ける」とは、五節の「隣人に対して暴力的に振舞う」との逆であるのみでなく、さらに積極的に隣人に対して仕える姿勢を示している。「自分が他よりすぐれて

いる点Vとは、自分がすでに神から無限に愛されていることを知り、感謝をもってこの事実を受け入れることであり、また人不足のある他人に親切をしようと欲しているVとは、その感謝の念を今や他者に向けようとする態度を言う。そして次の人神から頂いているものを不足している人に与えVもまた同じ姿勢を言い表している。

ここまでの処では「ディオゲネートス」の思想は極めて新約的（パウロ的）であって、われわれにとって特に異質的に感じられる処はないと言える。ところが六節の最後の部分において、われわれは突然非パウロ的な思想に出会う。すなわち、キリスト者が隣人に神の恵みを分ち与えようと善行をなす時、その人が相手の「神となる」*theos ginetai* という思想である。これは人間が神となるという、いわゆる人間神化の思想に他ならない。もちろん日本やギリシャの文献ならば、少しも驚くべきことではない。神と人間との区別が曖昧な民族内での発言ならば、極めて日常的なものであろう。しかしキリスト教の文献であり、初代教会からそれほど時代を隔てていない年代、しかもヨハネやパウロの影響の下にある筈の文書の中で、このような表現はいったいどのように解したらよいのであろうか。人間は神の被造物であって、創造者なる神とは明確に区別されるというのが、旧新約聖書を貫く基本的な人間観である。また本書の著者も、それもこの一〇章の冒頭において神が人間を人ご自身の像に基づいて形づくられたと述べたばかりなのである。その聖書的、

ヘブライ的な主張と、この六節における主張とはいったいどのようなようにして結びつくのであろうか。まともはこの句を受けとる限り、著者の思想に矛盾があると言わざるを得ないのでないか。神の模倣者になることから神となることまでには、無限の距離が存する筈である。このような表現はもちろん思想も全く新約とは異質のものであると言ふべきではないのか。

秀村氏は神の模倣者という「ディオゲネートス」の思想が、著者の神の啓示への信仰から生じたものであることを確信して疑われないのであるが、氏は人が神となるというそれに続いて現れる思想についてもそのような正統的な信仰から生じたものとみなされるのであろうか。われわれはこの点に関して深い疑念を持たざるを得ない。

### III

人間が神となる、すなわち人間神化の思想は「ディオゲネートス」が書かれた時代の地中海沿岸の世界においては決して珍しいものではなく、二世紀末になるとキリスト教文献の中にさえその痕跡を認めるようになるのである。ここではクレメンスとヒッポリュトスの例を掲げるところに止めよう。

クレメンス *パイダゴゴス* III・一・五

△ロゴスの住む人は……神に等しく創られている。……またその人は神

となる。なぜなら神がそれを欲するから▽

ヒポリュトス「哲学的思想」一〇—三三

△しかしもし君が神になり、たいと思ふならば、創造者に耳を傾け、今彼に逆らうな▽

同右一〇・三四

△君は神にな(ろうとし)った。……君は不死なものとして生れたので、神的なものに創られたのだ▽

同右一〇末尾

△その貴い教えに耳を傾け、善なる方のよき模倣者になったのだから、君はこの方と等しくなり、この方から栄誉を与えられるであろう。なぜなら神はほどこしを求めず、君を御自身の栄光のために神とされたのだから▽

「ディオグネートス」にもはっきりと△神となる▽(theos ginetai)と述べられているのであるから、そこに人間神化の思想が現れていることは否定できない。特にすでに掲げたクレメンスのパイダゴゴスとの文章上の相似はかなり著しい。クレメンスが△その人は神となる▽と言

い、それに続いて△神がそれを欲するからである▽と述べている箇所は、われわれの文書の一〇・四の△神は欲すればおできになるのだ▽ (dynatai thelonies autou) が神に倣うという趣旨の文と結びついているのと酷似している。どちらの場合も、神の意志が人間の不可能性を打ち破り、これを可能とするという点で一致しているのである。

このようなわれわれの印象を正面から打ち崩すのが、R・ブレンドレである。彼は次のように論じる。<sup>(7)</sup>

△theos ginetai という表現は後のギリシャ教父の神化の教理の意味で理解されてはならない。……著者は「その人は神となる」という用法を神の模倣という表現と密接な関係において用いている。両者によって著者は本質による同一性、あるいは神と人間との近似性のみを検証しているのではない。神と人間との近似性に至るのは存在においてではなく、行為においてである▽。

すなわちブレンドレによれば、クレメンスのパイダゴゴスにおける「神となる」と「ディオグネートス」における「神となる」とは同じ事柄を言い表しているにもかかわらず内容は全く異っている。したがって人間神化の危険性は「ディオグネートス」においては全く認められない、と言うのである。それでは両者はどのように違うのであろうか。この点についてさらに徹底的に論じているのがH・I・マルーである。彼は次のように言う。<sup>(8)</sup>

△われわれの本文はこの種の大胆さを自らに認めない。すなわち、ここでは神の模倣者とは全く相対的で派生的な意味でのみ「ある種の神」に過ぎないV。

この「相対的で派生的な意味」での神というのは、創造者であり全能である生ける聖書の神でもなく、またギリシャ神話などに登場するような不死なるもの (athanatos) としての神々のひとりでもなく、それらとは全く区別された、人間の社会生活のある局面において神の役割を代表する者、という意味での神を指すのである。(9)

以上のブレンドレとマルーの主張はかなり説得性があるように思われるが、しかし私はこれらの説に必ずしも同意することはできない。すなわち私の考えでは、「ディオグネートス」の著者はブレンドレの言うほどに厳密に存在と行為とを区別しつつこの語を用いているとは思われぬし、マルーの言うようにこの語について厳密な概念規定をした上で述べているとも思われぬのである。むしろ彼ら二人よりも十数年以上早く次のような解説を加えたH・G・ミーチャムの控えめな論述の中にこそ、「ディオグネートス」の真の姿が見られるのではないであろうか。(10)

△われわれの書の著者は明かに、人間が神の属性にあずかることができ、人間に対する神の役割を果たすことができるという一般的な考えに従っている。しかし彼はこれを愛と善き業が信仰にとって欠くべからざるものであるというヨハネの教説の光の下で行っている。……初めの二

つの箇所(ヨハネ一三・三四・Iヨハネ三・一六以下)において、恩恵とキリストの模倣とが結びついていることに注意せよV。

ミーチャムの論理は先の二人ほどには鋭くない。彼はただ、「ディオグネートス」も時代と環境から完全に自由な場で著作しているのではなく、第二世紀半ばから末にかけて小アジアで一般に行われていた思想に逆らうことなく素直にそれを自らの中に取り入れているが、しかし著者はそれを無自覚に行っているのではなく、内に確固としたパウロ・ヨハネたちから受け継いだ使徒的信仰を抱きつつ、それによって論じているのだと言うのである。この極めて何気ない描き方の中に、「ディオグネートス」の性格がよく表わされていると言える。

われわれはミーチャムの所論を最も「ディオグネートス」の本質をついたものとして、これを高く評価したいと思う。その上で尚、彼の主張にもかかわらず私はある危険な傾向を指摘せざるを得ない。すなわち、たとえ著者がヨハネの教説の光の下で自覚的に神化の語を用いたとしても、そのことを明確に表す言葉がない限り、無自覚と同じ結果となるという危険性である。

#### IV

すでに見たように、ブレンドレもマルーも「ディオグネートス」の信仰の正統性を弁護し、たとえ非聖書的な概念を持ち出しても決して内容

的には非聖書的ではないと断固として主張するのであるが、はたして彼らの言うように本書の信仰の正統性は確かなのであろうか。

たとえば、ブレンドレは「ディオグネートス」とクレメンスが同一の用語を用いていても内容(11)は全く異なると主張する場合の根拠として、「ディオグネートス」では△その人は神となる▽という用法を神の模倣という表現と密接な関係において用いていると述べている。しかしクレメンスには見られなくても、たとえば第二世紀末の教父ヒッポリュトスやナジアンゾスのグレゴリウスなどには同様の表現が見られるのである。

△その尊い教えに耳を傾け、善なる方のよき模倣者になったのだから、君はこの方と等しくなり、この方から栄誉を与えられるであろう。なぜなら神はほどこしを求めず、君をご自身の栄光のために神としたのだから(12)▽

△君は神の慈愛を模倣すること、不幸の中にいる彼の神となれ。なぜなら人は善を行うことほど真に神の性質にあずかることはないのだから(13)▽

これらの例においては、正にブレンドレの言う神の模倣と神化の思想とが結びついているのである。特に後者はわれわれの書の手法と相当に似通っていると思われる。だがそれにもかかわらず、「ディオグネートス」の場合には「神と人間との近似性」は「存在においてでなく行為に

において」であって、教父たちの場合には存在における近似性であるゆえに両者は区別される、と断言できる根拠はいったどこにあるのであろうか。われわれはこの点を疑わざるを得ない。

さらにマルーについても疑問を呈せざるを得ない。彼は「ディオグネートス」において「神となる」ということは、聖書の神やギリシャの神々のような超人間的な存在になるのではなく、あくまでも人間として他者に対し神の役割を果たすという意味だと言うのであるが、そのことは教父たちの場合には聖書の神、不死なる神々の意味で言われているということの意味するのであろうか。

このような議論は厳密な実証を伴ったものというよりは、それぞれの「ディオグネートス」に対する思い入れとも言うべきものによって支配されているという感を深くする。「ディオグネートス」の著者が二世紀後半において、パウロやヨハネの忠実な後継者としてキリスト教の弁証に当たったということは確かであろう。彼が自分自身を正統的なキリスト者として位置づけていたということも間違いない処であろう。しかし彼が僅か十章という短い著作の中で表現し得たことというのは、極めて限られた内容に過ぎない。しかもすでに検討したように、そのキリスト論一つをとってみても、個々の句の場合には時にパウロ以上にパウロ的な表現が見られるが、全体としては決して十分説得的ではなく、その傾向は神学的というよりは倫理的である。決して著者が異教的であるとい



うことではないが、彼自身の気がつかない処で異教的な思想への流動の危険性を内に持っていることを認めなければならないのではないであろうか。そのことは決して著者のキリスト教弁証家としての価値を低めることにはならない筈である。

この、著者が気がつかない処での異教的思想への流動の危険性ということも、ただ印象的に主張するのであれば、われわれもまたブレンドレやマルーと同じ誤りを犯すことになり兼ねないであろう。そこでわれわれの主張の根拠を見出す作業が必要となる。それをどこに見出したらよいであろうか。

われわれはその手掛りを、第二世紀後半に活躍した小アジア出身の神学者エイレナイオスに見出し得ると考える。エイレナイオスによれば、キリストは教師として神との交りを意図し、その結果自由な人間に神の模倣者となる能力を与えられた。<sup>(14)</sup> また彼はキリスト教において提供されている最高の宝は、不死性という賜物によって与えられた人間の神化であると説いている。<sup>(15)</sup> たとえば人間は身体と魂とによって罪を犯したので、両方共が墮落を免れるために救済としての神化を必要とするとい<sup>(16)</sup>う。これを可能としたものがキリストの受肉なのである。かくしてエイレナイオスは、信仰者の神化という教理を生み出す発端を作り出したと言<sup>(17)</sup>うことができるであろう。

エイレナイオスは通常グノーシス主義の異端に対して、ポリュカルポ

スを通して伝えられた使徒ヨハネによる正統的信仰の立場に立って戦った人として知られる。だが彼は、たしかに「神化」(theopoesis)という語を巧みに避けているものの、「神と結びつく」とか「神に密着する」という極めて紛らわしい語を用いている。<sup>(18)</sup> これは「ディオゲネートス」の「神となる」の場合とほとんど差を見出すことの出来ないほど、神化の思想に近い。少くとも新約正典には見出すことの出来ない表現である。

この現象はどこに由来するのであろうか。われわれはこれを彼のキリスト論に由来するものと考ええる。なぜならばエイレナイオスは人間が神と等しくなることの根拠をキリストの受肉にしているからである。<sup>(19)</sup> もし彼のキリスト論が正統的なものであるならば、キリストの受肉が真の神が真の人となられたという、全く独自の出来事であることがその論述の中に貫かれていなければならない筈である。ところがその受肉の出来事が、人間が神と等しくなることの根拠であることは、取りも直さずエイレナイオスにおいてキリストの神性が正しく位置づけられていないということになるのではないであろうか。

もう一つは養子の思想である。<sup>(20)</sup> 通常養子説というのは、第三世紀後半に活躍したサモサタのパウロスが主張したキリスト論の一形態に対して付せられた名称であるが、エイレナイオスは神が人間を養子とされることによつて神と等しいものとされると説く。そこにはキリスト論の一般

化が見られると言えよう。

「ディオグネートス」の神化の思想からエイレナイオスの神化の思想への移行は、そのキリスト論に由来すると言えるのではないであろうか。彼の救済論はパウロに多くを負いながら、十字架による贖罪の意義に関しては徹底していないことがしばしば批判される。それは結局そのキリスト論に問題があると言いうことができるのではないであろうか。

この点で「ディオグネートス」はどうかであろうか。なるほど本書はヨハネとパウロ、特にヨハネの影響を多く受け、神化の思想に関しても新約的な信仰と矛盾するものではないと言えるかも知れない。しかしたとえそうであったとしても、新約文書には見られない神化の概念が一度でも現れているということは、第二世紀後半の地中海世界においては起爆剤を内に抱えていることを意味した。その場合、キリスト論そのものがしっかりとしたものであれば問題ないのであるが、それが多少なりとも不確かである場合には不安ががつきまとうであろう。すなわち、「ディオグネートス」は自ら意識していると否にかかわらず、また好むと好まざるにかかわらず、たまたまヘレニズム思想またグノーシス主義に由来する神化の概念を自らの中に持っているために、それが非福音的方向に向う可能性を持った文書である、と言わねるを得ない。

注

- (1) 川村「ディオグネートスへの手紙のキリスト論」I、III、東京女子大学比較文化研究所紀要 第四〇巻 二五—三七頁、第四一巻 二二—三四頁、第四五巻 八一—八八頁。
- (2) 川村「ディオグネートスへの手紙——一、二、三章の問題を中心に——」『聖書の思想・歴史・言語』関根正雄教授還暦記念論文集 四三七—四五五頁。
- (3) H. D. Betz, *Nachfolge und Nachahmung Jesu Christi*, BHTH 37, Tübingen 1967, 137-138.
- (4) 以下の論述については左の小論を参照せよ。川村「Secutio et imitatio Christi——ヘブル書神学の問題の研究——」比較文化研究所紀要 第二九巻、五三—一二五頁、特に六二—六三頁。
- (5) C. Leslie Milton, *Ephesians*, NCB, Grand Rapids 1981 (=1973), 1745.
- (6) 秀村欣二「使徒後の時代のキリスト者と世界——ディオグネートス書翰の場合について——」基督教史学 三一九—三二六頁。
- (7) R. Brändle, *Die Ethik der «Schrift an Diognet»*. Eine Wiederaufnahme paulinischer und johanneischer Theologie am Anfang des Zweiten Jahrhunderts, ATANT 64, Zürich 1975, 125.
- (8) H. I. Marrou, *A Diognète*, Sources Chrétiennes N°33 bis, Paris 1965<sup>2</sup>, 145.
- (9) 同右同頁の注4参照。
- (10) H. G. Meecham, *The Epistle to Diognetus*. The Greek text, with introduction, translation and notes, Manchester, 1949.
- (11) クレメンスの用法は「次のようにあるべきこと。 té tote ara anthropos geneitai theos. Clem. protr. 8, 4.
- (12) Hippolytus, *philosophumena* X, 34.

- (3) Gregorius Nazianzenus, orationes XIV, 26, 27.
- (4) Irenaeus Lugdunensis, adversus haeresis V.1, 1. cf. A. von Harnack, Dogmengeschichte I, 559 f.
- (5) Irenaeus, op. cit., III, 18, 7: Haerere itaque fecit et adunivit, quemadmodum praediximus, hominem Deo. .... Et nisi homo cointus fuisset Deo, non potuisset particeps fieri incorruptibilitatis.
- (6) ibid., III, 17, 2: Corpora enim nostra per laetacrum illam quae est ad incorruptionem unitatem acceperunt, animae autem per Spiritum. Unde et utraque necessaria, cum utraque proficiunt in unitatem Dei, ....
- (7) M. Lods, Précis d'histoire de la théologie chrétienne du II<sup>e</sup> au début du IV<sup>e</sup> siècle, Neuchâtel, 1966, 145, cf. M. Aubineau, «Incorruptibilité et Divinisation selon saint Irénée», RSR, 1956, p. 25-52.
- (8) cf. J. Quasten, Patrology, I, 311.
- (9) Irenaeus, op. cit., III, 19, 1: Propter hoc enim Verbum Dei homo, et qui Filius Dei est Filius hominis factus est, <ut homo>, commixtus Verbo Dei et adoptionem percipiens, fiat filius Dei.
- (20) cf. ibid., III, 6, 1 (bis); 16, 3 (bis); 19, 1 (bis); 20, 2; 21, 4.

〔短期大学部教授（キリスト教学）一九八三年度個人研究員〕